

Speaking the Unspoken Tales: The Image of Woman and the View of Life and Death in George MacDonald's Works

隈部, 歩

<https://hdl.handle.net/2324/4784371>

出版情報：九州大学，2021，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 隈部 歩

論 文 名 : Speaking the Unspoken Tales: The Image of Woman and the View of Life
and Death in George MacDonald's Works

(語られなかった物語を語る—ジョージ・マクドナルド作品における女性像と死生観)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

George MacDonald (1824-1905)は、信条の違いから聖職を追われた後も『語られぬ説教集 (*Unspoken Sermons*)』で自身の大切な信条を人々に伝え続けていたため、彼にとって「語られなかった (the unspoken)」ものは我々が普段はつきりと見聞きすることのできない何かより深く特別なものであった。従って、本論文は、MacDonald の作品における女性像と死生観のこれまで語られなかった部分にそれぞれ着目して、それらを結び付けることにより、女性像と死生観に新たな光を当てることを目的とする。MacDonald の生きたヴィクトリア朝は女性への抑圧力の大変強い厳格な家父長制社会であったため、彼が作品中で強く印象的な女性達を多く描いているのは注目に値する。しかしながら、一般的に女性像は、異性愛的観点から女性を男性との関係性においてのみ考察される傾向にある。このようなアプローチは、女性像の考察を制限し、女性キャラクター達を男性の価値観に合うステレオタイプな女性像—理想的な良妻賢母像である「家庭の天使」と、男性的な規範に抗うファム・ファタル或いは「新しい女」—に二分することに繋がってしまう。更に、ほとんどの女性像研究は、成人した女性の男性との関係性に着目することで、女性同士の結び付きや少女 (の成長) の重要性を見過ごしてしまっている。すなわち、これらは女性像研究の盲点—「語られなかった」もの—であり、本研究はそれらに光を当てて行く。また、MacDonald 作品の死生観については、彼が元牧師であったという伝記的事実も手伝って、キリスト教的な観点から彼の「死後にあるより豊かな生」という信条にフォーカスされがちである。それにより、彼が同様に誕生やこの世の生への考えを多くの作品に描きこんでいるという事実が軽視されてしまっている。よって、本論文は先行研究が見過ごしていた上記の事柄に着目し、MacDonald 作品の女性像と死生観の「語られなかった」ものを語る試みである。

女性像と死生観を結び付ける本論文と似たアプローチとして、U. C. Knoepfelmacher と David Holbrook の論があるが、これらの研究も上記の「語られなかった」もの達を明らかにすることはできていない。Knoepfelmacher は MacDonald の描く、成長が止められた少女像に着目し、それを「存在前の状態」だと見做して MacDonald の死や超越への執着の表れだと考察する。Holbrook は、ほぼ全ての MacDonald 作品を網羅し、心理学的アプローチを用いて女性登場人物達を作者の死んだ母や、彼

女を生き返らせた欲望と結び付けている。Knoepfmacher も Holbrook も、やや作者の伝記的事実を強調し過ぎており、作者の母の早期の死に焦点を当て、彼の作品を「喪失の回復」という観点から読むことで彼の死への固執を明らかにしている。加えて、これらの研究では、女性を男性との関係からのみ考察するに留まっている。従って、本研究は、非異性愛的かつ女性中心的なアプローチを使い、特に少女の成長や、母娘関係の様な女性同士の結び付きに着目することで、MacDonald の「語られなかった」死生観—続いて行く生命、成長、そして生きる苦しみ／喜び—を浮き彫りにする。

第 1 章では、*At the Back of the North Wind* (1871) を扱い、North Wind の身体性や実在性と彼女と Diamond 少年の相互的な非異性愛的な関係性に着目して、「誕生としての死」を考察する。先行研究では、North Wind は、単なる死の象徴として見做されてきたが、彼女達の関係性を通して、そして彼女を身体ある女性として見ることにより、死後にあるより豊かな生と同様にこの世の生の重要性について明らかにする。更に、見過ごされてきた女性同士の結び付きにも着目し、女性登場人物達が North Wind が身体化する/身体性を保持するのを助けることを示す。第 2 章では、*The Princess and the Goblin* (1872) と *The Princess and Curdie* (1883) の二部作を考察する。疑似的な母娘関係と見做すことができる二人の Irene の二部作を通した強固な結び付きに着目することにより、MacDonald がこの世の生への考えをいかに描きこんでいるかをあぶり出す。第 3 章では、少女像を詳しく考察するために、“The Carasoyne” (1871)、“Little Daylight” (1871)、“The Light Princess” (1864) といったフェアリーテイルにも言及しながら、主に“The History of Photogen and Nycteris” (1879) を扱う。Nycteris という少女の込み入った困難な成長に焦点を当て、彼女の何も知らない無垢な目で世界を見ることにより、我々生きている人間が描写することのできない誕生や死の瞬間を疑似的に経験できることを明らかにする。加えて、Nycteris と彼女の「見えない・盲目の (*blind*)」母の見えない関係性を可視化することにより、MacDonald の死生観がより鮮やかに見えてくることを示す。第 4 章では、*Lilith* (1895) を扱い、母 Lilith と娘 Lona の関係性に着目することで生命の奪い合い・相互性・継承がいかに描かれているか明らかにする。この母娘は、一見対極的な存在—力を欲し男性的な規範に抗う破壊的でセクシュアルなファムファタルと、母性的で清らかな理想の女性「家庭の天使」—に見做されるが、彼女達の共通点に着目することにより、彼女達の強固な結び付きを明らかにすると共に作品中の女性像を単に二分するべきではないことを示す。彼女達のもつれてはいるが特別な結び付きを、Eve と Mara というもう 1 組の母娘にも言及しながら考察することで、MacDonald の「進んだ」女性像を浮き彫りにすると共に、彼の死生観を、特にこれまで見過ごされて来た誕生やこの世の生、生命の連続性といった彼の生命観をも明らかにする。本論文は、「語られなかった」もの達—多様な女性像、特に少女像や女性同士の結び付き、そして生命観—を結び付けることで、MacDonald にこれら「語られなかった」ものを語らせるものである。